

石和鷹

isaawa taka

レストラン

Restaurant KASSAI-TEI

喝采亭

# レストラン 喝采亭

集英社

初出誌一覧

レストラン喝采亭「すばる」一九九〇年九月号  
角の帽子屋「三田文学」一九八九年秋季号  
ダミーの報酬「すばる」一九九一年十二月号  
巡礼宿さかえの湯「すばる」一九九二年九月号

石和鷹

一九三三年、埼玉県生まれ。

『野分酒場』で第十七回泉鏡花文学賞を受賞。

著書『果つる日』『蓮の星月夜』『八月の独白』

レストラン喝采亭 かつさいてい

一九九一年十二月二〇日 第一刷発行

著者 石和鷹 いさわ たか

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇  
郵便番号 一〇一―五〇

編集部 (〇三) 三二三〇―六一〇〇  
電話 販売部 (〇三) 三二三〇―六三九三

製作課 (〇三) 三二三〇―六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目次

レストラン喝采亭

5

角の帽子屋

67

ダミーの報酬

105

巡礼宿さかえの湯

169

あとがき

239

装丁  
菊地信義

レストラン 喝采亭



レストラン喝采亭



いくらＪＲや地下鉄の駅に近いとはいえ、繁華街とは反対側の裏通りにある木造モルタル三階建て雑居ビル一階の小さな洋食屋に、『レストラン喝采亭』とは大仰な、と当初は嗤われもしたが、大仰で何が悪い、とマスターの佐分利は思っている。

目いっぱいつめこんでも、せいぜい六、七人で肩が触れ合うほどになるカウンターと、四人掛けの椅子席が二つあるだけのたった五坪の店だから、そう言われても仕方のないところはある。

カウンターの向うがすぐ調理場で、大型の冷蔵庫や食器棚もそこにすえつけてある、となれば、最近、少々肥満の進んできた佐分利には、ときにうつとうしく、息がつまるように感じられることもないではない。まあ、その程度の息苦しさは、がまんするほどもなくすぐに通りすぎてしまふけれど、せめてここにもう一台ガスレンジを置けるだけのスペースがあつたらなあ、と思うことはしばしばだ。すればはるかに手際よく、家族づれや急ぎの客をさばくこともできるだろうに……。

そんなふうだから、マスターであると同時にただひとりのコックでもある佐分利の動きは、カウンターの客からは丸見えで、指先にくっついたマヨネーズを舐めるときなんか、つい舐め

てしまった後で間の悪い思いをしたりするのは避けられない。

そうそう、この店にはそれにトイレもない。用をたすには、二階にある共同トイレまで駆けあがらねばならぬ。二階と三階は、何やら正体不明のちっぽけな事務所やうさんくさい酒場で占められ、タイミングをはずすと酒場の客と並んで順番を待つような仕儀にもなる。

だが、そんな不便もいまはいとわない。彼はトイレの順番を待つ人たちにまで、ていねいに腰を折って挨拶する。やあ今晚は、お先にどうぞどうぞ。酒場の客は、明日は『喝采亭』の客でもあるのだ。われながら仕事熱心、と彼は思う。

佐分利道郎、四十三歳。

ここに店を出して、もう足かけ十年になる。女房と二人だけで、この店を守り抜いてきた。どんなにみすばらしかろうと、『喝采亭』はおれの城だ、と佐分利は思っている。大仰？ ふん。つけもついたり、だと？ いいじゃないか。この店名には、おれの若き日の夢が塗りこめられているのだ。ついにかなえられることなく終ってしまったけれど、栄光の座をめざして血の汗をしばっていた若き日の夢のなごり……。

近ごろ擡頭めざましいバンタム級の新鋭ボクサーとして、佐分利は関係者とはもとより、江湖の期待を一身にあつめていた。彼が二十歳になつたばかりのころのことだ。

「まず新人王だよ。それでランキングのどん尻にはつける。日本チャンピオンが見えてくる。まだ遠いけどな。そこからどこまで行けるかは努力次第だ。なに、東洋がどうしたと？ 生意

気言うな、ガキのくせしやがって！」

ジムの会長はやにわに怒声を発したが、すぐ、真顔になって言い足した。「でも、行けるかもな、お前なら」

佐分利は会長の言葉を嬉しく聞いた。

野心は際限もなくふくらんだ。減量の心配のない、褐色の、きりりと引きしまった軀だった。練習でどれだけ痛めつけても、一夜明ければ疲労は跡かたもなく、五体はみずみずしく回復している。

四回戦から六回戦にいたる十試合を、佐分利は無敗で勝ち進んだ。うち、KO勝ちが六度もある。

勝利の夜の眠りは深く、したがって目ざめは言おうようもなくさわやかで、今夜もう一度試合をしろ、と命じられても、十分それに応えられるだけの余力を残していると感じられ、佐分利は誇らしかった。

一戦一戦、確実に、栄光の座が近づいてくる、と、われひとともに思った。日本、東洋、そして運がよければ、いや運じゃあない、男なら世界をめざすのだ。ワンツー、ワンツー。毎日が、ピン、と張りつめていた。

おごりがあつた、とは思いたくない。そんなものこれっぽっちもなかった、とはつきり言える。が、佐分利は、自分でも信じられないことだが、新人王の王者決定戦で敗れたのだった。

対戦相手は、バッファロー、と異名を持つ五つ年長の矢上勇吉。パンチは当りさえすれば一

瞬目の前が真白になってしまふほどにも重いけれど、佐分利とは対照的な、粗野で無技巧の選手だった。思い出したように左のジャブは打ってくるが、フットワークもなければ、ほとんどノーガードに近い隙だらけの構えで、実際、相手のパンチはおもしろいように彼の顔面やボディに突き刺さり、炸裂した。しかしながら矢上勇吉は、無数のパンチを浴びながらも、平然としてリングの中央に立ちつづけている。眉ひとつ動かすではなく、存分に相手に打たせてから、気のなさそうな、ほとんど眠たげな顔つきで、じり、じり……と、間合いをつめてくる。まさしく不感無覚の、癡猛で不気味な牡牛だった。バッファローがどれだけのダメージを受けているのか、誰にもわからない。受けていないのかもしれない。そう、思わせるところがあった。するうちに、それまで優勢に戦いを進めていたはずの当の相手のほうが打ち疲れ、ふといや気がさし、氣づいたときにはロープを背負って矢上勇吉の前にくず折れているのだった。

それが矢上のやり方であり、本領なのだ。

佐分利との試合でも、前半はまったく同様の経過をたどった。手ごたえは十分だったが、矢上は徹底的なロボットの無表情を変えずにいる。

が、ようやく第四ラウンドで、佐分利の右アッパーが鋭く矢上の顎を捉えた瞬間、奇怪なかたに歪んだその口からねばつく唾液とともにマウスピースが飛び出した。佐分利はこのときの観衆の大歓声をはっきりと記憶している。バッファローはタタラを踏んだが、体勢を立てなおすや、のしかかるように、こっちへ向って突き進んできた。相変らず無防禦に近い姿勢ながら、佐分利よりたった二センチ上背があるだけの矢上の上半身が、岩山のようにそそり立って

見える。左へ左へとまわりこみながら、いつしかロープに追いつめられていた。バッファローの浅黒い顔が目の前にせまっている。不感無覚のはずのその顔が、無表情どころか憤怒に燃え、いつもは眠っているような両眼が血のすじを浮き立たせて、悪性の腫瘍みたいにふくれあがっているのを佐分利は見た。こちらへ軀をあずけるようにしながら、力まかせのフックを、左、右……、と繰り出してくるのを、からくもウィービングでかわしつつ、右のカウンターをバッファローの目の下にヒットさせる。いい感じだ。のけぞるところへ、さらに追い打ちをかける。とまどっている、と見えたバッファローの右ストレートがいきなり、来た。そいつを左にヘッドスリップしながら、同時にこちらからもお返し of 右ストレートを顎に送りこむ。やった、と感じ、おや、と思った。右拳に異様な衝撃があり、激痛が一と呼吸、おくれて来た。それが、重大な、取返し of のつかぬ異変であることを、瞬時にして佐分利はさとった。足を使いながら笑みを浮かべたつもりだが、たぶん、唇の端が引きつれただけだったろう。顔面はあますところなく、蒼白となっていたにちがいない。汗がいちどきに噴き出して目にしみ、顎の先から流れ落ちる。佐分利はもう、何も考えることができなくなっていた。

この回はゴングに救われたが、勝負はすでに終わっていたと言っている。佐分利は残る二ラウンドを、左腕一本で戦わねばならなかった。観衆に気づかれてはいなかったらうけれど、矢上勇吉は佐分利の右の拳に何が生じたか、同じ戦うもの同士の、いち早く察知していて、さあどこからでも来い、打てるものなら打ってみろ、と言わんばかりに、両手をだらりと下げ、こ

とさら呼びこむようなしぐさをしたりする。

試合は継続中なのに、矢上のボーカーフェイスの裏側に、早くも、図に乗った勝者の余裕を佐分利は見た。それが次第に憐憫の色にとつてかわる。憐れみは欲しくなかった。くそ、それなら左だけで仕留めてみせる。この二ラウンド、いや一ラウンド半で目にも見せてくれる！手負いの佐分利が必死に繰り出す左ストレートを、矢上はよけるでもなく、打たれば仕方がないともいったふうに、まるつきりタカをくくって、がら空きになった佐分利のテンプルに、ぼん、ぼん、とフックを打ちこんでくる。

気の抜けたパンチだった。音に聞いた破壊力はまったくくない。

こいつ、手心を加えてるのか。

そう思ったとき、佐分利は敵のパンチではなく、屈辱にしろめいた。無二無三に前へ前へと出たが、右をかばうゆえに攻撃はどうしても正確さを欠き、フットワークも乱れて、気持だけが空まわりしている、とわかる。佐分利は悲しかった。

最終ラウンド、試合終了のゴングを、彼は遠いお寺の晩鐘のように聞いた。前半の攻勢点もむなしく、試合は三ポイントの差でバッファロー矢上勇吉の判定勝ちだった。

「お前のようなパンチ力の強いやつにゃあ、よくあるアクシデントだ。仕方ないよ」

と、会長はなぐさめてくれたが、それがその場だけの単なるアクシデントにとどまらず、彼のボクサー生命にとどめを刺す容易ならぬ運命の訪れであったことを、佐分利はやがて思い知らされることになる。

危惧した通り、佐分利は右手の中指と薬指の第二関節を骨折していた。鋭利なナイフのよう

な右ストレートの切れ味の良さ、速さが、彼の身上であり誇りともするところだったが、同時にそれは、みずからを深く傷つける凶器でもあった。

これが一応の治癒を見るまでに、二ヵ月を要した。予後は順調、と医師は太鼓判を押してくれたが、早くも、ボクサーとしての再起を危ぶむ声の一部にささやかれていることを、佐分利は知らぬではなかった。

だが、これしきのことであきらめてなるものか。高校生のころから、進学の希望も捨てて励んできた数年間の辛苦が、いったい何のためだったかわからなくなる。同時に、もう一度バッファローと対戦したいという、胸をしめつけてくるような執念が彼を支えた。キャンパスに大の字になっている矢上勇吉を、何が何でもこの目で見たい。それを見とどけるまでは死んでも死にきれぬ、と思った。

実際、軽くバンチングボールをたたけるようになるまでに、さらに半年近くもかかったが、彼は唇を噛んでこの時期を乗り切った。

ところが、再起第一戦で、佐分利はまたしても、右手中指の同じ部位の負傷で、あえなく敗れ去ったのだ。これまで二勝四敗のキャリアで、その四敗のすべてが一ラウンドKO負けという、誰が見ても格下の、楽勝と思われた相手だった。いうところの噛ませ犬だ。もらったパンチはほとんどなく、まだ、汗もかいていなかった。

控え室にもどったとき、会長はバンデージを剥がすや見る見る腫れあがった彼の右手を自分の掌にくるみながら、うめくように言った。

「俺が悪かったよ、サブ。やっぱり、ちょっと早かった。誤算だった」

「いや、会長」

と、佐分利は勢いこんで言った。「また、やりますよ。何度でも、おれ、出なおしますよ」  
「そうよ。まだ若いんだから、なあサブ。これから何だってできるよ」

何気なく聞き流したその言葉が、しばらくしてから、拳の痛みよりも強く、鋭い錐の穂となつて佐分利の胸を刺した。断念ということの、世にも苦い味わいを、生まれて初めて彼は知った。

その後、ほどなくして、佐分利はジムを去ったのだ。いちどきに、十も二十も年をとつてしまったような気がした。

ボクサーとしてはまだまだ何ほどの存在でもなく、そのために費した五年間はあまりにも貴重に思える。何度でも出なおす、とは言ったものの、ジムの外へ出てみればどっちを向いても壁だらけで、いったいどう出なおしたらいいのか、見当もつかなかった。

## 二

佐分利が矢上勇吉を心底から憎んだのは、それから実は一年あまりも経ってからだ。

佐分利と戦つて新人王を獲得するや、矢上は日本バンタム級九位にランクされ、その特異な試合ぶりですます人気をあつめた。

サンドバッグのように打ちこまれ、棒立ちとなつて、あわや……、と見せながら、起死回生